

大塚敬節
矢数道明
責任編集

近世漢方醫學書集成

77 淺井貞庵 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 77

浅井貞庵(一)

第Ⅲ期
全40卷

昭和五十六年十一月二十五日 発行

編者

大塚敬節
矢数道明

発行者

中村安孝

発行所

株式会社
名著出版

東京都文京区小石川三ノ五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一一〇七四番

製版所

株式会社
日本写真製版社

印刷所

有限会社
伊藤印刷

製本所

辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫

丁亥上元春祭事記

示長子翼

一縷香煙仰碧空恩輝七世
數微躬聊將實意求遐福不
要虛名取近功夙夜猶經依
舊訓春秋奉祠引芳風承家
有道須勤慎天命榮枯瞬息中

廿一日開講

久承家學說經篇反覆披繙四
十年飽覽自慙何所得病身常
苦竟難痊晉知培塿無珍木安
識汚泥出碧蓮但願兒孫能繼
業焉春勤替此開筵

七世淺井貞庵（正封）示教書、

八世正翼二示

丁亥上元春ノ祭事記リ、長子翼二
示ス。

一縷香煙碧空ヲ仰グ、恩輝七世
微躬ヲ歎ズ、聊力実意ヲ將テ、遐福
ヲ求ム、要セズ虚名近功ヲ取ルヲ、
夙夜経ヲ繙ギ、旧訓ニ依リ、春秋祠
ヲ奉ジテ芳風ヲ引ク、家ヲ承クル道
有リ、須ラク勤慎ナルベシ、天命榮
枯瞬息ノ中。

〔注〕丁亥〓文政十年（一八二七）貞

庵五十八歳ノトキ

微躬〓イヤシキ身分 遐福〓永ク

続ク幸福 芳風〓正シイ音楽 勤

慎〓ツトメツツシム

廿一日開講

久シク承ク家學說經篇、反覆披繙
四十年、鈍質自ラ慙ス何ノ得ル所ゾ。
病身常ニ苦シミ竟ニ痊工難シ。曾テ
知ル培塿珍木無キヲ。安ンゾ識ラン
汚泥碧蓮ヲ出スヲ。但ダ願フ兒孫能
ク業ヲ繼ギ、万春此ノ開筵ヲ替フル
勿キヲ。

〔注〕培塿〓小サイ丘

凡 例

- 一、本書第七十七卷「浅井貞庵(一)」には『方彙口訣』卷一～卷五までを収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、印刷不明な箇所は、補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 方彙口訣 大塚敬節氏所蔵写本のマイクロ写真本(矢数道明所蔵)
 - 一、解説は矢数道明(北里研究所・東洋医学総合研究所所長)が執筆した。
 - 一、巻頭の口絵は、『浅井国幹先生顕彰記念文集』(昭和五十年)によった。

尾州藩医宗浅井家七世の俊英

貞庵・浅井正封の業績

矢 数 道 明

一、貞庵・浅井正封の略伝と浅井系図

浅井正封（一七七〇—一八二九）

名は正封、字は堯甫、幼名を小藤太、後平之丞と称した。号は貞庵、また榊園、静観堂、文燭とも号した。明和七年（一七七〇）十月一日、名古屋に生まれ、文政十二年（一八二九）二月二十日六十歳で没した。法号を「智境院貞庵日静居士」、墓は名古屋市千種区城山町二―四七、日蓮宗常楽寺に在る。中村習齋に就いて朱子学を修め、岡田新川に漢唐の文辞を学んだ。

正封は生まれながらにして聡明抜群で、幼時すでに一度耳に入るものは嘗て忘れることがな

ったという。祖母はその余りにも聡明なため正封が夭折するのを怖れて、城南住吉天神に祈願して、その才智の半ばを献じて、その長寿を祈ったという。

八歳のとき父母相次いで没し、十二歳のとき義父正路（南溟）も四十八歳で早逝し、十三歳のとき祖父図南も没した。そのため天明二年二月二十五日、十三歳にして、九代藩主宗睦に謁し、九月二十九日藩医となり、医学教授を命ぜられた。まもなく京都に医学修業のため上洛し、遊学七年二十歳にして郷に帰り、はじめて講堂に上って学生教養の任に当たった。

それより先、天明四年十五歳のとき筆を執り、李瀚業求の体に倣って唐以後の事を集輯し、十七歳の春、遂に『三瀆私抄』三冊を著した。

寛政十一年六月、藩医子弟の学業を試問して勤怠登庸の制を定め、また市内に医業を開かんとするものは、浅井氏の認可を得ることとして統制の掟を作った。

そして医学館を浅井氏邸内に藩の費用を以て造営することを命ぜられ、当初は名古屋城中別殿に仮設、次いで藩校明倫堂に移され、文化年中浅井氏邸内、西南隅に五間と九間の講舎を造り、正封はこれに静観堂講舎と名付けた。講義は本業は『素問』、『靈樞』、『傷寒論』、『金匱要略』とし、兼業は『本草備要』、『薬性歌括』、『本草綱目』とした。試問は十年を期として、完了したものに白銀一枚を賞賜し、寄合医または番医に拔擢せられ、市井医業を開くものは、町方用懸或いは医師取締役が試験し、浅井家がこれを統轄した。

寛政十一年十二月一日、初めて藩主に屠蘇奉獻の命があった。明年の元旦の宴に国君及び中將君、淑姫君に屠蘇散、白散、度瘴散、膏藥を古式に則り調製して奉納し、以後毎年浅井家の例格となった。そのとき正封は、小森典藥頭が内裏及び五摂家に奉獻する古式を学んだ。この年十二月二十四日奥医師に任ぜられた。

文化十年、文豪頼山陽が正封の盛名を聞いて名古屋に來たり、浅井家を訪問した。正封、その子正翼が歓待数夜に及び、山陽は喜んで詩二首を揮毫して残し、正封はこれを裝飾して書室に掲げたという。

正封は人となり温潤、度量あり、博学多識、凡百の技芸に通じていた。儒学は程朱を好み、最も山崎闇斎を慕い、中村習齋と交友した。門人多く集まり、その数凡そ三千余人に及んだ。

かつて命を奉じて古方医書を探求し、『尾藩禁方集成』七十五卷を選述して奉上した。文政十年十一月、仁和寺の秘庫に宝蔵する『太素經』残本二十二卷、『新修本草』五卷を密かに借り受け、苦心の末これを謄写して伝えたことは、画期的大事業であつた。

正封は本草学にも通じ、尾州の本草学者水谷豊文の名著『物品識名』及び『物品識名拾遺』共四卷は、はじめ正封が著述に当たり、眼疾のため中絶し豊文が代つてこれを完成したという。このことはわが国の本草学史上にも特記さるべきことで、尾州の本草学の最盛期に活躍した正封の功績であり、尾州藩の藥草園の運営にも参画し、藥品の吟味を行い、藥品会、本草会を開催する

など数々の功績を残している。

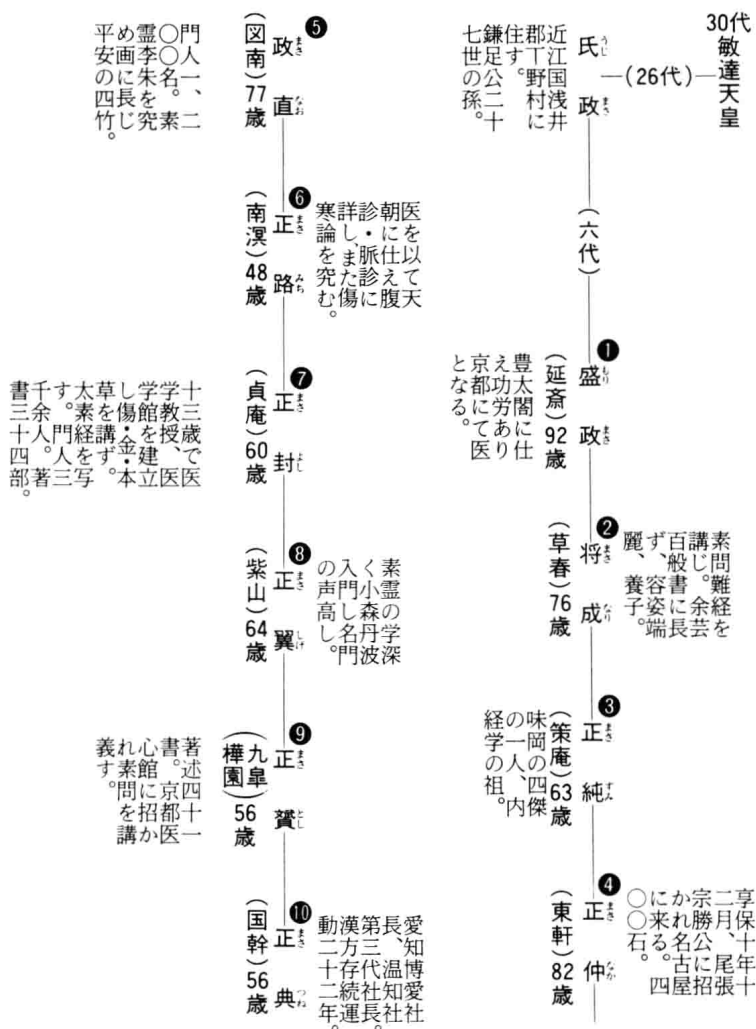
いま浅井十代の系図を次頁に掲げて、名門浅井家の全貌を概括することにした。

二、仁和寺太素経の発見とその伝写

十世浅井国幹の遺稿『浅井氏家譜大成』中に従来ほとんど知られていなかったいくつかの秘録がある。その第一に挙げられるのが『太素経』の発見である。今までの記録によると、『太素経』を仁和寺より借りうけてこれを筆写し、世に出したのは八代目の正翼まさつばということになっていた。即ち渋江抽斎・森立之共著の『経籍訪古誌』(本集成53巻に収録)にも、服部甫庵の『太素経序』にも、「最初に模写したのは尾藩医学教授浅井正翼まさつばである」と書いてある。弟有道が『漢方と漢薬』誌で黄帝太素経の研究を発表したときもこれを引用し、「筆写は文政末年であろう」と推定していた。ところが『浅井氏家譜大成』をみると、文政十年十二月に正封まさほうが九人の筆生をして、これを写したその顛末が詳しく述べられている。その発見の動機がまことに興味深いので、現代風に意訳転載してみる。

『太素経』と『新修本草』とは久しく世に出なかった。人々はその名は知っているが、実際にその書を見たことがない。正封の友人に東道策とうどうさくという人があった。もと和丹わたんの方を習学して京都に住んで医業を営んでいたが、すこぶる名声があった。かつて仁和寺の坊さんである増田内蔵人と

浅井家略譜とその医系



いう人の病気を度々治して効があった。

あるとき話の序に増田内蔵人が道策にフト語っていうのに、書庫のお経の中に太・郎の太の字と素・麵の素の字を書いた珍らしいお経があると告げたので、道策は是非みせてくれということになった。これは『太素経』は巻物となっているので、仏教のお経と間違えられて混入してしまったらしい。道策がみると、これこそ『太素経』二十二巻と『新修本草』五巻であった。しかし仁和寺は御室宮といわれて嚴重な法規の下に管理され、いかに高位高官の名門でもこれを見ることができないことになっていた。道策はひそかに内執事に乞うてとうとう貸借の許可をとった。

これを調べてみると仁平仁安（保元平治の前後）の間、丹波憲基、頼基等が伝写したもので、すでに紙は爛れ、軸は朽ち、欠亡している文章が沢山ある。

ところで道策はあえてこれを私せず、浅井家が代々素霊の学を講じていることを知っているの
で、早くこれを謄写して浅井家の書庫に納めて進ぜようと、筆写専門の傭数人を頼んで写させようとしたが、虫が喰っていてどうしても写せないといつて皆帰ってしまった。

そこで道策は、正封に謄写をよくするものを派遣してくれと依頼した。正封は門人の中から塚原修節を選び、大毛村榮泉寺の僧英山師とともに京に向かつて急遽出發させた。とにかく大切な品であるから、借用日数に限りがある。大急ぎ写させなければならない。修節はその書を視て思うのに、急いで写しても十人以上でかからなければ無理である。名古屋に持ち帰って手を揃えて



尾張藩医・浅井家歴代の墓碑(名古屋市覚王山・常楽寺墓地)

後列向かって右より2番目、浅井平之丞とあるのが正封貞庵の墓碑。
前列右端が浅井国幹の墓碑。(竹内幹彦医博撮影)

■浅井家歴代の墓碑見取図

五世 浅井頼母(政直南)	八世 浅井紫山(正翼重太郎)	浅井玄隆(政恭棟庵)	七世 浅井平之丞(貞庵)	浅井子的(正準)	一世 盛政(延壽秀吉に仕え、後に医業の始祖となる。92才没。)	二世 将成(草春素難を究め、書家。76才没。)	三世 正純(策庵内経字、味噌の四隣。63才没。)	(以上三代の墓は京都妙満寺にあり)
門人の数二〇〇人、墨竹の面に長す。77才没す。	素盡、李朱を学究め、素盡に詳しく、名声天下に鳴る。64才没。	正仲の養子。素盡に詳し。60才没。二月廿二日没。	学教授、素盡、傷金。本草を講ず。文政十二年二月廿二日没。	十三才で医学教授。素盡の養子。正封の父。	正路の父。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。
六世 浅井周碩(正路南溪)	浅井家累代之墓	浅井有隣(正時)	十世 浅井国幹(正典篤太郎)	九世 浅井樺園(正翼)	四世 浅井周迪(正仲東軒)	浅井須磨(正翼の妹)	享保十年、尾張藩公に召されて名古屋に来る。82才没。	享保十年、尾張藩公に召されて名古屋に来る。82才没。
腹診派の祖、傷寒論に詳し、和氣正路と称し、宮中に出入す。48才没。	正路の子。	二十二年間、漢方存続運動に挺身す。明治廿一年宮中に出入す。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。	著書四十一冊、京都医心館に素問を講ず。56才没。

着手すべきであるという結論に達したので道策を説き、執事に懇願し、とうとう秘密裏に二回に分けて借り受けることに成功した。

ときに文政十年十一月十三日、先ず十二巻を借り受けて帰り、大急ぎで写し終わり、十一月二十二日に再び京都に向かつて出発し、前の十二巻を返還し、十二月一日、残りの十巻と『新修本草』五巻とを借りて帰った。全部の模写が完了したのは十二月十日、一カ月足らずで写し終え、使を派してこれを返却した。正封はこのとき喜びのあまり一詩を賦し、模写の人々の功労を讃え、その完了を喜んだ。

いまこの一詩の読みと、その解説と評とを、新田興先生にお願いしたので左に掲げてみる。

玉函封訖付官郵。 一路山川入帝州。

玉函封訖付官郵。ギマカシマシマフカスウシヨ 一路山川入帝州。イツロサンセンイルチヨ

宝籍本非塵界物。 香雲擁護幾春秋。

宝籍本非塵界物。ハウセキモトネジンカノモノ 香雲擁護幾春秋。コウウンヨウゴイクシヨシユ

〔語解〕 玉函二神仙医方ノ書。官郵二郵便。帝州二畿内京都。宝籍二人間至宝ノ書。塵界二

俗界。香雲二仏徳。春秋二歲月。

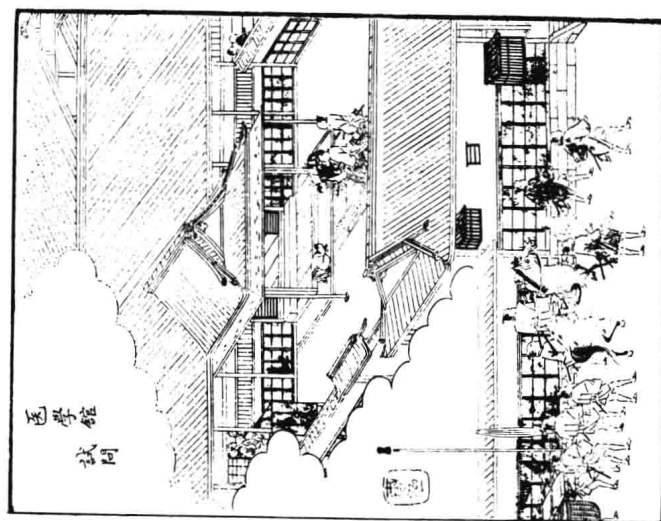
〔意解〕 玉函ヲ写シ了ハリ、返送ノ為メニ郵便ニ托シタ。一路山川道中無事ニ京都ノ仁和寺ニ到着スルデアラウ。此ノ宝籍ハ元来俗界ノ物ニアラザル故、仏徳ニ擁護セラレテ今日迄幾歲月

ヲ経テ来タ。又今後幾月ヲ閱シ行クコトデアラウ。

(此詩甚ダ高尚温雅ナリ、満足ト感謝ノ意ニ溢ル、秀逸ト謂フベシ)(雲処批)。

正封はこのとき筆写に協力した人々の名を列挙し、筆写中の熱心な行動を激賞している。その名を挙ぐることに九人、塚原修節、僧英山、大河内存真、柴田承慶(現東大名誉教授・柴田承二博士の祖先)、勝野常庵、加藤梅春、高田貞純、加藤周禎、小笠原道範の順序である。

正封がこれほどの努力を払って模写したのに、その子正翼が写したと誤り伝えられた理由を考えてみると、正翼も素霊の学を究め、幕府医官小島学古と仲良しで、後年『太素経』を写して学古に贈呈し、学古がこれを公表したためであろうと思われる。『浅井氏家譜大成』では、「正翼の時に至りて、幕府医官小島学古と友とし好し、故を以て太素一本を贍^うし送る。今東京に此書あるは小島氏に出ず」と記してある。



医学館試問

医学館及第名所図会にのせ置ける遣りを補ふ、試問は唐の及第の風なり、春秋両度当館にして諸医官（寄合御医師小普請御医師等をいふ）及び惣御医師の子弟年中修業の勘定を試む、試司は代々浅井家に属す（寛政十一年より浅井平之丞官命をうけ給りて試問を司る）書品は素問靈樞難經傷寒論金匱要略その外諸方書諸本草等なり、当日参政二人監察の上司一人右筆署の棟梁一人並に奥表之官医出席ありて問対を檢察す、云々。（小治問之 真清水巻之一）

